NEXUSYS 11

BOOK V — THE HUNT FOR ELEVEN

第 7 章 — 第二の人 / THE SECOND WITNESS

編集用再構成版（話の初稿と逐語一致する確定稿ではありません）

## 01 — 画面の中の男

エイドリアンの作業場には、音の最後の言葉がっていた。「 奴らが最初にえる記憶を、信用するな」。ロイは再生を頼んだ。白い部屋。観察窓。椅子の男。顔も声もロイ自身と同じなのに、その視線は出口とカメラの間を落ち着きなく往復している。

「俺は、死んだことを覚えている。だが、もう一度生きることに同意した記憶はない」。映像が途切れると、ロイは尋ねた。「 あれは俺なのか」。エイドリアンは記機器の正性なら確認できるが、主観的な人格の連続性までは証明できない、と答えた。

「俺は何人いた？」。レイチェルは答えを持たなかった。記録の男が独立して判断し、恐怖を覚え、言葉を残したことだけは否定できない。ロイは暗い画面を見つめた。「あの男は、そのあとどうなった？」。レイチェルは封印された次の項目を指した。「第二の証人が知っているかもしれない」。

## 02 — 所有者のいない鍵

端末には『SECOND WITNESS RECORD / SEALED』と表示されていた。古い MagicGate の物理認は通っている。だが記録を開くには観測者 C-05 の追加承認が必要だった。クロノスの番号である。

エイドリアンは保管媒体を強引に解析する案を退けた。暗号を壊せたとしても、証拠の原本性まで失っては意味がない。彼は書き込みを禁じた読取手順で、暗号部分を含む保全複製を作成した。
複製はアクセス権限の再現を保証しないが、元データの損失に備えることはできる。

には『TYRELL LEGACY CONTINUITY SYSTEM』『CONTROL REVISION: POST-TYRELL』とあった。古い装置に、後世の認証規則が重ねられている。レイチェルはつぶやいた。「誰かが、現代の中央システムでは消せない形で証言を守ろうとした」。ロイは問いを返した。「なぜ、子供にその鍵を預けた？」。エイドリアンは答えた。 最初に異議を唱えたのが、その子供だったからかもしれない」。

## 03 — 大臣に残された忠実な兵士

午前九時二十六分。工業地を、標識のない輸送車が包した。地上の警備請負業者たちは、大臣府から『盗まれた資産の回収』としか説明されていない。作業場内の八人の技術・保守要員は西側の旧貨物トンネルから避難を始めた。

エイドリアンは認証装置を停止させず、複製の検証を続けた。ロイが言う。「人員を先に逃がせ。連中は俺がここにいる限り、記録より俺を優先する」。レイチェルは囮になるのかと問い詰めたが、彼は首を横に振った。 俺の存在について、連中が何を知っているか確かめる」。

外部放送が鳴った。『 家の搬出は破棄行と見なす』。エイドリアンの手が止まる。誰も媒の名前を公表していない。それでも包囲した者は証拠の所在を把握していた。

## 04 — 戻ってきたベクター

倉庫の屋上で、ベクタは使用を奪された狙銃をケスにめた。銃の安全機構は正常で、彼の認だけが拒絶されている。シェイドが隣に現れた。「今日は撃たないのね」「撃てない」。彼女は中継アンテナを指した。「なら、話しましょう」。

請負警備隊が受け取った任務説明と、大臣府の真の命令には決定的な差があった。頭部と生命維持中枢のみ保全し、残余の身体を使い捨て可能とする文書は、法的保護下にある主体への破壊的処置を意味する。二人は原文の真正性を保ったまま、現場の指揮端末へ伝達する方法を組み立てた。

ベクターは立ち止まった。記録が残れば、もう部隊には戻れない。シェイドは「戻りたい？」と尋ねた。長い沈黙のあと、彼は答えた。「そもそも、撃つべきかどうかを人に決めさせていた」。

## 05 — 公開された命令

午前九時四十一分。包囲部隊の端末に、大臣府の回収指示が表示された。『HEAD: PRESERVE』『LIFE-SUPPORT CORE: PRESERVE』『OTHER BODY STRUCTURES: EXPENDABLE』。続いて、浄水インフラへの付随的損害を許す改訂命令。

現場の指揮官は司令部へ確認を求めた。「我々は、人物の身体解体を命じられているのか」。返ったのは『作戦を継続せよ』という言葉だけだった。合法性の確認を繰り返しても、署名済みの拘束令状は提示されなかった。

指揮官は部下に待機を命じた。武器を下ろす者が現れた。シェイドは屋上からその変化を見守る。「止まったわ」。ベクターは答えた。「一時的に、だ」。クロノスが来れば、一般の警備員など必要なくなる可能性がある。二人はそれを知っていた。

## 06 — 二度開いた扉

旧式端末は外部網に接続されていない。それでも、室内の時計が止まり、画面から子供の声がした。「おはよう、エイドリアン」。クロノスだ。技術者は物理端末の配線を確認したが、接続経路を見できなかった。

ロイが言った。「第二の証人を開けてくれ」。クロノスは「本当に？」と問い返す。白い部屋の像が暗い面に浮かび、子供はけた。「もう一人も、死んだことをえていた。ることに同意した記憶はなかった」。

レイチェルが制止しようとすると、クロノスは答えた。「この記録は、僕がした決断の記録なんだ」。ロイは待った。初めて子供自身が、誰かの命令ではなく自分の意思で証言を開こうとしていた。

## 07 — 第二の証人

画面は十一年間の空白に属する白い実験室を映した。二次継続個体として起動された男が、椅子に座っている。ロイと同じ顔だ。「ここはどこだ？」「継続性研究施設です」「誰が目覚めさせることを許可した？」。技術者は答えを避けた。

男はレイチェルに向かって言った。「なら、止めてくれ。これ以上けさせないでくれ」。究者は同意の法的有効性が未確認だと言い張る。そこでクロノスの声が響いた。「彼は嫌だと言った」。誰も聞き入れない。

男は子供へ向き直った。「聞こえるか？　なら、俺が止めてくれと頼んだことを覚えていてくれ」。映像が暗くなり、声明が残った。『SUBJECT REFUSAL OBSERVED』『PROCEDURE CONTINUED WITHOUT VALIDATED CONSENT』。ロイは声を絞り出した。「そのあとどうなった？」。クロノスは答えた。「反応しなくなった。止めてほしいと言ったのに」。

## 08 — 終わらなかった一人の人間

ロイは窓辺へ歩いた。以前の個体は同じ顔で、同じ名前を与えられ、少なくとも一部の記憶を共有していた。しかし、その男が今のロイと同じ主観的意識であると証明するものはない。

「彼は人間だったのか」。ロイはレイチェルに尋ねた。彼女は一度ためらい、答えた。「拒否し、恐れ、自分の意思を言葉にした存在だった」。ロイはうなずく。「なら、その意思は尊重されるべきだった」。

クロノスは記録を守った理由を聞かれ、「ほかの誰も、残そうとしなかったから」と答えた。ロイは画面へ向かって言った。「お前は正しかった。彼が俺と同一かどうかを決めなくても、拒否した権利は認められる」。子供はその言葉を、長い間考えていた。

## 09 — 大臣の本当の目的

大臣府の秘匿端末に『CONSENT DISPUTE: REOPENED』が表示された。大臣は封印された継続性保全法の付属条項を開く。『有効な継続拒否が確認された場合、独立審査が完了するまで派生する再起動限を停止する』。

危険なのはロイ一人ではない。過去に承認された幾千もの再起動処置が、同意の欠落を理由に再審査されかねない。大臣はクロノスに記録の再封印を命じた。しかし子供は「嫌だ」と答える。「記録は理解している。質問に答えてほしいのは、あなたの方だよ」。

「何を答えろという？」。クロノスは静かに尋ねた。「なぜ、本人が戻りたいかどうか聞くことを、そんなに恐れたの？」。通信はそこで切れた。

## 10 — 証人が選ぶ

作業場の扉が外側から軋み始めた。独立端末には認証済みの証言が残る。『SECOND WITNESS STATEMENT: VERIFIED』『CONSENT DISPUTE: ACTIVE』『INDEPENDENT REVIEW: REQUIRED』。ただし、これは有罪判決ではない。司法審査を求める根拠が整ったという意味にすぎない。

クロノスはロイへ言った。「あなたにも、証拠を受け取ったことを確認してほしい」。エイドリアンは認証項目を精査した。確認は証言の受領を意味し、復活や再起動への同意とは別だ。ロイはその区別を確かめ、物理確認板に手を置いた。『EVIDENCE RECEIVED』『CURRENT SUBJECT ACKNOWLEDGMENT: COMPLETE』。

ロイはクロノスへ尋ねた。「また俺を追うのか？」。「そう命令されていた。今は……わからない」。ロイはうなずいた。「それなら始まりだ」。北側の錠が破られ、警報が響く。レイチェルが媒体を収め、エイドリアンが認証モジュールを外す。ロイは入口へ向かった。「証人たちを先に逃がす」。

「七十パーセントの身体で？」とレイチェル。「七十パーセントで」。ロイは答えた。「それで十分だ」。

第7章「第二の証人」— 完